

『在韓米軍と韓国地域社会：
米軍の基地運営と民軍関係政策 1945-1971』

琴普云*著、成田千尋**監訳、広島：溪水社、2023年

李 定 恩†

日本からの独立以降、南北に米軍とソ連軍による分割占領下におかれた朝鮮半島は、朝鮮戦争を経て分断が決定づけられると、米軍が韓国に長期駐留することになった。その規模は次第に縮小したものの、現在も韓国には日本と同様に米軍が駐留している。

韓国人の国際移動について研究している評者は、本書の基づく歴史学や米軍基地研究を専門にする者ではないが、韓国人の国際移動において、アジアにおける米軍基地とそれのつくり出した人種およびジェンダー関係が、グローバル化および新自由主義と遭遇しながら、不平等な構造を含んだ新たな国際移動を生み出していることを目撃することがある。米軍基地は韓国人にとって何か、また米軍基地にとって韓国人、とりわけ隣接する地域やその人々とはどのような存在だったのかに関して関心をもち、本書を手にとった。

本書は米軍の駐留が始まりニクソン・ドクトリンにより一部の兵力が削減される、1945年から1971年までの時期を対象に、在韓米軍が安定的に基地を運営するために、基地の近隣地域の住民たちの生活空間にどのように浸透し管理していたのかについて、主に在韓米軍の政策に焦点をあてて論じている。

本書は、以下の4章により構成されている。

1. 米軍の駐屯地と権限の確定
2. 米軍の基地安全維持の強調と地域社会統制
3. 米軍基地地域社会構成員の包摂と生活圏の形成
4. 米軍の地域社会政策の亀裂と変化

では各章の概要について述べよう。

まず第1章では、在韓米軍が基地運営政策の対象として民間人の生活空間を想定し、韓国政府から権限を保障された背景と過程について論じている。朝鮮戦争以降分断国家となった韓国で米軍の

* 嶺南大学校民族文化研究所研究教授

** 立命館大学衣笠総合研究機構助教

† 立命館大学衣笠総合研究機構専門研究員

jungeun@fc.ritsumeai.ac.jp

駐屯の長期化が決定づけられると、米軍は安定的に基地を運営するために、基地の敷地の拡大だけでなく、基地の権限がおよぶ領域を米軍が占有する基地の面積以上、すなわち民間人の生活空間にまで拡大した。このような在韓米軍の動きは、米軍が駐屯していたすべての国および地域でも見られているものではなく、分断国家となった韓国の特殊な事情が反映されたものである。この過程で、在韓米軍の権利は個人の権利より優遇され、その後韓国政府による牽制が試みられるものの、「駐屯軍地位協定」の締結を通じた米軍の権限の保障は、基地の近隣地域の民間人の生活空間を動員することを可能にした。

第2章は、米軍が地域社会をどのように設定し、また地域社会に対しどのような統制を行ったか論じている。在韓米軍は基地の近隣地域を、「米韓関係に直接影響を及ぼす」地域（81頁）とみなし、基地運営政策の下で「地域社会」、地域社会との関係を「地域社会関係」とした。在韓米軍は地域社会に対し安定的な長期駐留の不安要素として警戒したため、直接的な管理および統制活動を行った（119頁）。その中でも「米軍憲兵」は地域社会に対する直接的な統制活動とともに民事活動を並行し、警察権を行使していた。しかし行き過ぎた警察権の行使は、たびたび住民たちとの衝突を発生させ、住民たちの抵抗に遭遇した。このような住民の反発にも関わらず、「駐屯軍地域協定」のもとで行われた米軍の統制活動は、韓国政府の公認下で続けられたのである。

第3章は、在韓米軍が地域社会の構成員を対象に行った文化・経済的な交流活動に焦点をあて、在韓米軍が地域住民とどのようにネットワークを形成し、米軍基地の運営に動員していたか論じている。地域住民との交流活動は「地域社会関係プログラム」と名づけられ、人的交流や援助のような活動が含まれ、地域住民だけでなく、米軍やその家族の参加も奨励されていた（136頁）。米軍が対民活動を行うことに対して、共産主義の影響力の拡大を遮断しようとする「下からの冷戦」の米軍部の主要方案もその背景にあった。文化的交流活動は、「基地開放」や米軍による英語教育、ボーイスカウトの支援などがあり、米兵夫人たちもジェンダー的任務の遂行が求められた（152頁）。一方で、基地内の韓国人雇用者を活用しながら、基地内外の韓国人の管理や対民活動の任務を米軍とともに共有していた。このように在韓米軍は韓国人雇用者を基地運営の協力主体と想定しながらも、依然信頼することができない不安要素とみなした（213頁）。

第4章は、政策の確立や展開に焦点をあてた第1～3章までとは異なり、質的インタビューを用いて、基地近隣地域で現れた住民と米軍間の相互認識と亀裂について論じている。また、米軍基地運営政策の変化のもたらした影響についても論じている。本書が研究対象としている時期に、韓国に駐留した経験をもつ元米軍兵士やその妻への質的インタビューおよび地域住民たちとのインタビューが収録された資料や先行研究を用いて、在韓米軍が推進していた政策の意図に米軍兵士や地域住民たちが順応したわけではないということを指摘している。地域社会が安全保障上の脅威という警戒心に基づく人種的・社会的差別を余儀なくされた空間であったため、政策の意図に沿った「友好的関係」を築くことができなかったのである（272頁）。

その後、国際的な緊張の緩和とともに在韓米軍が削減されると、基地運営政策は地域住民との日常的対面から、基地運営の脅威になりうる要素を管理する方式へ変化し、結果的にこの地域が在韓米軍と韓国政府の両方から疎外されるようになった。

国際移動を専門とする評者にとって、本書は、「移動」という視点から米軍基地を考える新たな契機となった。米軍基地は、基地の中（米兵）と外（地域住民）、そしてその二つの空間を行き来する

人たちの移動によって維持される空間であることに、本書を読み、改めて気づいたのだった。それは、人種化されたアメリカの軍事主義の直接、また間接的な遂行の帰結であることはいうまでもない。しかし基地の安定的な運営のために、これらの移動、とりわけ韓国の地域住民たちや雇用人たちの移動を警戒し管理しようとした在韓米軍の政策には大きな矛盾があろう。

一方で、在韓米軍における多様な属性、とりわけ人種が基地運営の政策とその遂行においてどのような影響をもたらしたかに関して疑問が残った。著者も言及しているように、白人米兵、非白人米兵、韓国住民の関係で人種は多様な認識があり（91頁）、それによって問題が起きることもあったことが先行研究で指摘されている。例えば、性産業で働く韓国人たちが人種的偏見、あるいは生計のために、黒人兵士に差別的に接したことで、在韓米軍が「人種差別反対プログラム」などを実施した事例がある（Moon, 1997）。このように米軍兵士たちの属性と地域住民たちとの関係および相互認識が、基地運営政策とその遂行に影響をもたらしたことはないだろうか。

また、歴史学的手法を用いる著者の関心を超えることは承知だが、米軍基地運営の政策の影響が、今日グローバル化と新自由主義の深化の中でどのように継続、また変貌しながら、現在これらの地域社会のあり方を形づくっているか（本書で取り上げられた地域の一部は、すでに米軍基地が移転され、新たな観光地として脚光を浴びている地域もある）教えていただくことができれば、一読者として嬉しく思う。

本書の巻末には、韓国の事情に詳しくない日本の読者たちに向け、本書の監訳を務めた成田による解説、とりわけ沖縄の事例との比較・相関が収録されている。著者の言葉のように、米軍基地という共通の歴史と現実を抱える日韓の人々が共に悩み、今後の方向を模索しながら、平和に対する共感の輪を広げること（285頁）を願う人々に一読を薦めたい一冊である。

参考文献

Moon, Katharine H. S. 1997. *Sex among Allies: Military Prostitution in U.S.-Korean Relations*. New York: Columbia University Press.